

平成19年度第2回対馬暖流系アジ・サバ・イワシ長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2008年4月～9月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域の位置は、「屋久島南付近での変動」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「平年並み～やや高め」で経過する。

※ 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

漁況(来遊水準)

- (1) マアジは前年並み。
- (2) マサバは前年並み。
- (3) ゴマサバは前年を下回る。
- (4) マイワシは前年並みで平年を上回る。
- (5) ウルメイワシは前年を下回り平年を上回る。
- (6) カタクチイワシは前年・平年並み。

※ 「前年」は2007年4月～9月。「平年」は過去5年(2002～2006年)の平均値。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班

担当: 大隈、田中、佐藤

電話: 03-3502-8111(内線6800)、直通電話: 03-6744-2377、ファックス: 03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

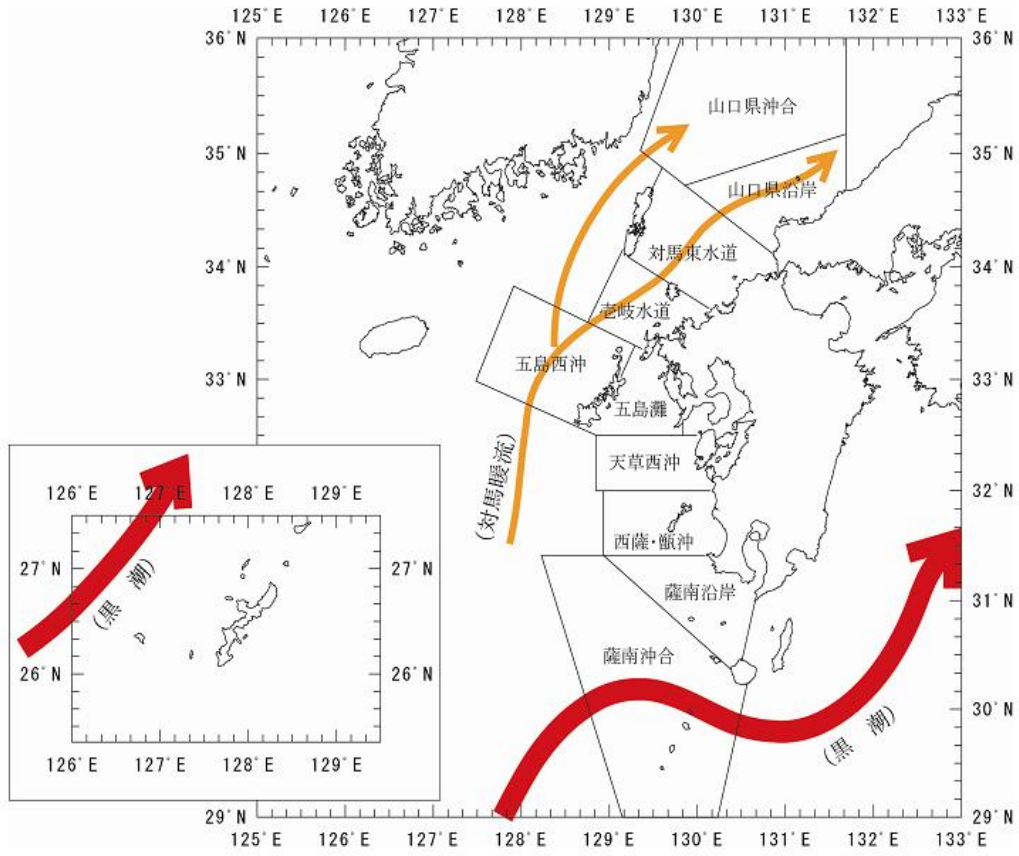
独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所 業務推進部

電話: 095-860-1600、ファックス: 095-850-7767

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://snf.fra.affrc.go.jp/>



予報対象海域

海況予報

1. 今後の見通し（2008年4月～9月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域の位置は、6月には「離岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」で経過する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甑沖、薩南沿岸、黒潮域、沖縄島周辺海域、大陸棚上では、前半、後半ともに「平年並み～やや高め」で経過する。対馬東水道、壱岐水道では、前半、後半ともに「やや高め」で経過する。

2. 経過(2007年10月～2008年3月)

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：10月「はなはだ高め」、11～1月「やや高め」、2月「平年並み」。

南部：10月「かなり高め」、11月「平年並み」、12・1月「やや高め」、2月「平年並み」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

沖縄北西方の黒潮の流路は、秋季、冬季ともに「平年並み」。流量は、秋季は「かなり多め」、冬季は「平年並み」で経過。

薩南海域における黒潮北縁域は、10・11・2月は「接岸傾向」、12・1月は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」で経過。

(2) 海面水温

10月「やや高め」、11・12月「平年並み」、1月「やや高め」、2月「平年並み」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：10月「かなり高め」、11月「はなはだ高め」、1月「かなり高め」、2月「平年並み」。

山口県沿岸：10月「はなはだ高め」、11月「かなり高め」、1月「やや高め」、2月「平年並み」。

対馬東水道：10月「はなはだ高め」、11～2月「やや高め」。

壱岐水道：11月「かなり高め」、2月「やや高め」。

五島西沖：11月「平年並み」、2月「やや高め」。

五島灘：11・2月「平年並み」。

天草西沖：10月「かなり高め」、11月「やや高め」、1月「平年並み」、3月「やや低め」。

西薩・甑沖：11月「やや高め」、1月「平年並み」、3月「やや低め」。

薩南沿岸：11・1月「平年並み」、3月「やや低め」。

薩南沖合：11月「やや高め」、1月「平年並み」、3月「やや低め」。

沖縄島南東：10月「かなり高め」、3月「やや高め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：10・11・1・2月「平年並み」。

山口県沿岸：10月「平年並み」、11月「やや高め」、1・2月「平年並み」。

対馬東水道：10～2月「平年並み」。

壱岐水道：11・2月「平年並み」。

五島西沖：11・2月「平年並み」。

五島灘：11月「平年並み」、2月「やや低め」。

天草西沖：10・11・1月「平年並み」、3月「やや低め」。

西薩・甌沖：11・1月「平年並み」、3月「やや低め」。

薩南沿岸：11月「平年並み」、1・3月「やや低め」。

薩南沖合：11月「平年並み」、1・3月「やや低め」。

沖縄島南東：10月「やや低め」、3月「平年並み」。

3. 現況(2008年3月上旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部「平年並み」、南部「やや低め」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」。

海面水温は「平年並み」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「平年並み」。

(註) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」： 約22年に1回程度の出現確率

「かなり」： 約7年に1回程度の出現確率

「やや」： 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」： 約2年に1回程度の出現確率

漁況予報

今後の見通し（2008年4月～9月）

対象海域：東シナ海～日本海西南海域

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2008年級群（2008年生まれ））、1歳魚（2007年級群）、2歳魚（2006年級群）。
魚の大きさは、あじ・さばは尾叉長、いわしは被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年を下回る。

(3) 魚体：15～25cmの1歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と25cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年を下回り、平年並み。

(3) 魚体：27～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）が主に、15～25cmの0歳魚（豆銘柄）も漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量：前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年を下回り、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(3) 魚体：30～37cmの1～3歳魚（小・中銘柄）が主に、15～28cmの0歳魚（豆銘柄）も漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量：前年並みで平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：ブロックの沿岸域全般で漁獲される。

(3) 魚体：15～21cmの0～2歳魚（中・大羽銘柄）が主に漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量：前年を下回り、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：漁期後半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は18cm以上の1・2歳魚（大羽銘柄）が、漁期後半は5～15cmの0歳魚（小・中羽銘柄）が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量：前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：主に5～7月に沿岸域に漁場ができる。

(3) 魚体：4月は10cm程度の1歳魚（大羽銘柄）に3～6cmの0歳魚（シラス・カエリ銘柄）が混じり、5月以降は5～10cmの0歳魚（カエリ～中羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2007年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

「沖合域」は大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2007年10月～2008年1月）および今後の見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980～1990年代前半に増加し、1993～1998年には近年では高い水準を維持した。1998～2000年の加入量減少のため資源は減少傾向を示したが、2001～2004年の加入量は1994～1997年の水準に回復し、2002～2004年には資源量も増加傾向を示した。しかし、2005年、2006年の加入量は低かったとみられ、資源量は2005年に引き続いて2006年も減少した。東シナ海・日本海（青森県～鹿児島県）での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976年には9～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980～1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2002年には13～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであったが、2005年には14万トン、2006年は13万トンに減少した。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970・80年代には比較的安定していたが、1992～1996年に増加傾向を示した後、1997年に急減し、1999～2006年は低い水準にある。東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバ漁獲量は、1970年代後半には27～30万トンであったが、その後減少し、1990～1992年には13～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降、漁獲量は増加傾向を示し、1996年には41万トンに達したが、1997年には21万トンに大きく減少し、2000年にかけてさらに減少した。2000年以降、漁獲量は8～9万トンの低い水準で推移し、2006年は92千トンであった。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に分布するゴマサバの資源量は、1992～2004年に比較的安定して同程度の水準を保っていたが、2005年以降は増加傾向を示している。東シナ海・日本海での我が国のゴマサバ漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移していたが、2004年には31千トン、2005年には76千トンと、近年は変動がやや大きい。2006年の漁獲量は61千トンであった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海においてマイワシは、1980年代後半から1990年代前半にかけて多く漁獲されたが、その後、急激に減少した。2001～2003年に漁獲量は1千トン程度で推移した。1999年には0歳魚がやや多く漁獲され、資源状態は低位ながらも一時上向いたが、その後は減少し、近年は極めて低位にある。海域によっては水揚量が前年を上回ることもあるが、全体として資源は依然として低水準である。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

対馬暖流域において、1970年代後半と1980年代後半に資源が多く、1980年代前半および1990年代

後半には少なかった。特に、1990年代後半から2000年まで資源は漸減傾向にあったが、2001年以降は資源がやや増加している。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

1970年代および1980年代は比較的安定した資源変動であったが、1990年以降に資源量が徐々に増加しはじめ、1997～1999年は極めて高い水準にあった。2000年以降には、資源量は再び安定して推移していると考えられる。

2. 漁況の経過

2007年10月～2008年1月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖およびバーレン沖が中心であった。この間の、大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計8万5千トンで前年（2006年10月～2007年1月、8万トン）並みであった。マアジは6千トンで前年（5千トン）並み、さば類は6万7千トンで前年（6万5千トン）並みであった。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、福岡県では前年を上回ったものの、その他の海域では前年並み～下回る漁獲となり、全体としては前年・平年並みであった。漁獲の主体は、15cm以下の0歳魚（2007年級群、今後の見通しでは1歳魚、以下同様）と15～20cmの1歳魚であった。マサバは、前年を下回り、平年並みであった。漁獲の主体は25～29cmの0歳魚であった。ゴマサバは、前年を下回り、平年並みであった。漁獲の主体は34～38cmの2・3歳魚であった。マイワシは、依然として水揚量は1980年代よりは低いものの、ブロック全体として前年を上回って経過した。漁獲の主体は15～20cmの0～2歳魚であった。ウルメイワシは、前年・平年を上回った。漁獲の主体は18～25cmの1・2歳魚であった。カタクチイワシは、福岡県で前年を上回り、山口県、熊本県、鹿児島県で前年を下回った。全体としても前年を下回り平年を上回った。漁獲の主体は5cm程度のカエリ（0歳魚）と10cm以上の1歳魚であった。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、4～9月期には1歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が漁獲の主体で、0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）、2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。2006年級群は2005年級群と、2007年級群は2006年級群とそれぞれ同程度の豊度と考えられる。2005年以降、加入水準の低い年が続いているとみられ、これに伴い比較的高い水準にあった親魚量水準も低下するものと見込まれる。2008年級群の豊度を予測するのは難しいが、親魚量は2007年と同程度か低い水準と考えると、0歳魚（2008年級群）は前年（の0歳魚、以下同様）と同程度か低く、1歳魚（2007年級群）と2歳魚（2006年級群）は前年と同程度と見積もられる。これらから、全体の来遊量も低調であった前年並みと考えられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE（1日当り漁獲量）は、近年、比較的高い値で安定していたが、2006、2007年は減少した（参考図参照）。沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量は、近年、比較的高い水準で安定している。沖合域の漁況は、来遊量が前年並みであることを反映して、低調であった前年並みで、沿岸域の漁況は、前年・平年を下回ると考えられる。

(2) マサバ

例年、4～9月期には1歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。2006年級群は2005年級群と、2007年級群は2006年級群とそれぞれ同程度の豊度と考えられる。2008年級群の豊度を予測するのは困難であるが、親魚量の水準は横ばい傾向で、初期生残の良否に関わる環境要因の指標と見られる水温（東シナ海南部、2月）が、2008年は2007年よりやや低いので（水温が低いと初期生残に有利）、2007年級群と同程度かやや多いと見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚（2008年級群）は前年並みかそれよりやや多く、1歳魚（2007年級群）と2歳魚（2006年級群）は前年並みと見積もられる。主に漁獲される1歳魚が前年並みであることから、全体の来遊量も前年並みと考えられる。

沖合域の漁況は、来遊量が前年並みであることを反映して前年並み、沿岸域の漁況は好調であった前年を下回り平年並みと考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、4～9月期には1～3歳魚（小・中銘柄）が漁獲の主体で、0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。2005年級群の豊度は2004年級群より低く、2006年級群の豊度は2005年級群より低く、2007年級群は2006年級群と同程度の豊度と考えられる。2008年級群の豊度を予測するのは困難であるが、初期生残の良否に関わる環境要因の指標と見られる水温（東シナ海南部、1月）が、2008年は2007年よりやや高いので（水温が高いと初期生残に有利）、2008年級群は2007年級群と同程度かやや多いと見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚（2008年級群）は前年並みかそれよりやや多く、1歳魚（2007年級群）は前年並み、2歳魚（2006年級群）と3歳魚（2005年級群）は前年を下回ると見積もられる。2・3歳魚が前年を下回ることから、全体の来遊量は前年を下回ると考えられる。

近年、沖合域、沿岸域（鹿児島県）の漁況の指標は変動が大きい。沖合域の漁況は、来遊量が前年を下回ることを反映して、前年を下回ると考えられる。沿岸域の漁況は、4～6月は1～3月と同一群が漁獲対象となるので、2・3歳魚主体に前年を下回り、平年並み、7～9月は、1歳魚主体に0歳魚が加入し、低調であった前年を上回り平年並みと考えられ、期間全体としては、前年・平年並みと考えられる。

(4) マイワシ

2001年に東シナ海、日本海における産卵調査の結果が過去最低となり、この頃の沿岸域におけるマイワシの水揚量は極端に低かった。ただし、2002年に沿岸域での水揚量は底打ちとなり、その後は前年を上回る水揚量で推移してきたが、2000年以前に比べると依然として極めて低水準である。今後は0歳魚の加入量によって来遊水準が決まると考えられるが、加入は産卵親魚量水準が依然として低いため、1980年代のような水準は見込めない。ただし、近年はマイワシにとって加入条件が良い年が続いている。

(5) ウルメイワシ

2001～2002年に0歳魚の加入がやや良く、来遊水準は一時上向いたものの、その後は漸減傾向が続

いている。2007年夏季に行った計量魚群探知機調査では、前年を大きく上回った。2006年春季に鹿児島県で1・2歳魚主体の漁模様が良かったが、2006年11月以降は前年並みで経過した。2007年4～8月における各県の水揚量は前年を大きく上回り、2007年級群は2006年級群より良かったと考えられる。今後の来遊量は2008年級群の加入の成否と2006年級群および2007年級群の産卵親魚量によると考えられ、2007年級群は近年では高い水準であり、2008年級群は多かった2007年級群並みか下回ると考えられる。

(6) カタクチイワシ

2005年以降の1～3月に大羽イワシの来遊が多く、これらの年の春期発生群の加入はやや良かった。ただし、2006年夏季に行った計量魚群探知機調査では、現存量指標値が前年を大きく下回ったが、2007年は近年では高い水準にある。また、4～8月の来遊水準は、11月以降の来遊水準と正の相関、および五島灘の2月下旬の水温偏差と4月以降の来遊水準が負の相関を持つ。11月以降の来遊水準は高く、水温偏差はやや低いので来遊水準は良いことが期待される。

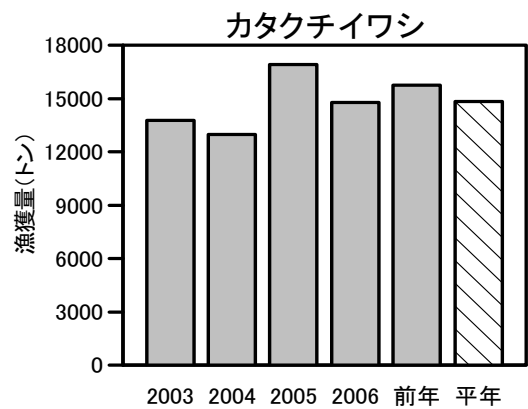
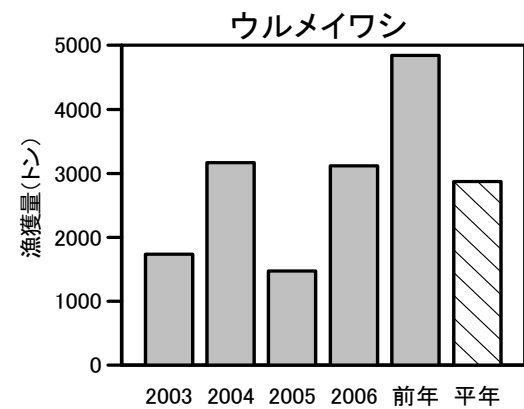
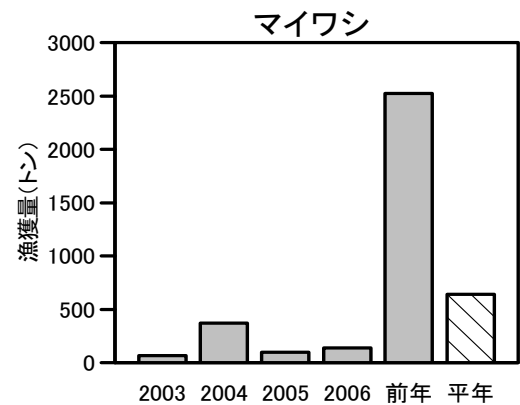
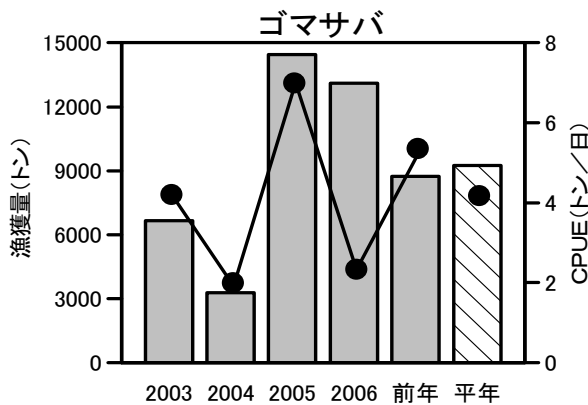
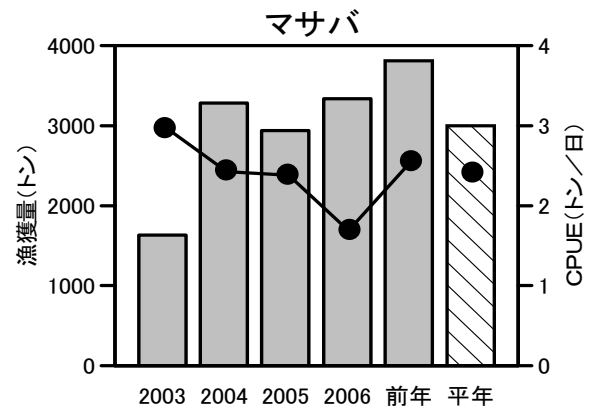
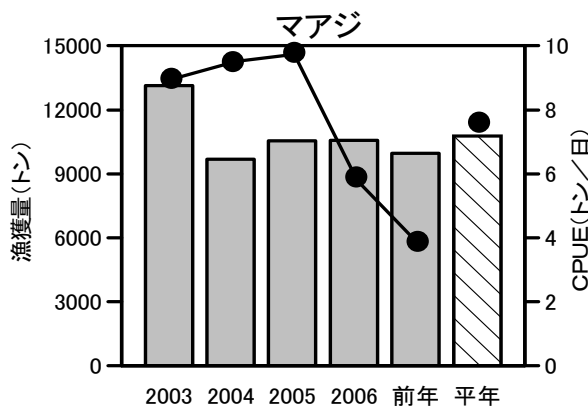
表1. 沿岸域の漁況経過 (2007年11月～2008年1月、一部2007年9、10月を含む)

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	<p>中型まき網で786トンの水揚げがあった。これは前年比79%、平年比116%で前年を下回り、平年を上回った。湊支店の棒受網では、ゼンゴが10～12月にかけて0.536トン水揚げされ、前年比36%、平年比35%であった。</p>	<p>中型まき網で393トンの水揚げがあり、前年比40%、平年比71%で前年・平年を下回った。湊支店の棒受網では、1.5トンが水揚げされ、前年比7%、平年比13%であった。</p>	
福岡	<p>中型まき網漁獲量は380トンで前年比192%、平年比96%と平年並み。マメ(0歳魚)がやや多く、大(3歳以上)が低い比率。棒受網の漁獲量は81トンで前年比74%、平年比66%とやや不漁。</p>	<p>中型まき網の漁獲量は448トンで前年比160%、平年の117%と平年並みであった。小型のギリがほとんどで、平年比308%。棒受網での漁獲量は1.3トンで前年比18%、平年比19%。まき網同様ギリ銘柄がほとんど。</p>	<p>中型まき網の漁獲量は2トンで、前年比4%、平年比2%と不漁。棒受網、小型定置網では漁獲されなかった。</p>
佐賀	<p>不漁であった前年は若干上回ったが、平年を下回った。(前年比106.2%、平年比79.4%)</p>	<p>豊漁であった前年を下回ったが、昨年を除く平年は上回った。(前年比13.2%、平年比50.7%、昨年を除く平年比175.1%)</p>	
長崎	<p>地域により差があるが、概ね前年を下回り、平年並みであった。(前年比74%、平年比85%)</p>	<p>地域により差があるが、概ね前年を下回り、平年並みであった。(前年比78%、平年比82%)</p>	
熊本 牛深港	<p>水揚量は50.2トンで前年比42.6%、平年比65.8%であった。</p>	<p>水揚量は43.2トンで前年比4.6%、平年比15.1%であった。</p>	
鹿児島	<p>4港のまき網で、11～12月は中アジ(2005年級群)主体、1月は豆アジ(2007年級群)主体であった。11～12月は平年を下回り低調に推移していたが、1月に入り豆アジ(2007年級群)の漁場が、鹿児島湾口部に形成され漁況が好転した。期間中合計で845トンの水揚げで、前年・平年並みであった。 (前年比105%、平年比110%)</p>		<p>4港のまき網で、期間中、薩南海域が主漁場となり、ゴマサバ中(2004年級群・2005年級群)主体であった。また、北薩海域では、ゴマサバ小・中(2006年級群・2007年級群)主体であった。期間中合計で3,077トンの水揚げで、前年を下回り、平年並みとなった。 (前年比44%、平年比85%)</p>

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	中型まき網での水揚げはなかった。湊支店では9～10月に棒受網でヒラゴを主体に11トン水揚げされ、前年比18%、平年比36%と、前年・平年を下回った。	湊支店の棒受網は10月に大羽66%、小・中羽34%の割合で680トン水揚げし、前年比152%、平年比176%と前年・平年を上回った。	湊支店は棒受網で325トン水揚げし、前年比73%、平年比98%であった。銘柄組成は大が9トン(3%)、中小羽が3トン(1%)、カエリが2トン(0.5%)、シラスが311トン(96%)であった。今期は10～11月のシラス水揚量が多く、44年間の統計史上3番目の好漁となった。
福岡	中型まき網の漁獲量は0.3トンで、前年比34%、平年比69%。棒受網、小型定置網ではほとんど漁獲されなかった。	中型まき網の漁獲量は2.7トンで、前年比43%、平年比28%と不漁。棒受網では全く漁獲されなかった。	棒受網(集魚灯利用すくい網含む)の漁獲量は70トンで、前年比171%、平年比330%と好漁。
佐賀	水揚げなし。	水揚げなし。	前年並みで、平年を下回った。(前年比101.3%、平年比68.8%)
長崎	一部の地域では若干の漁獲も見られたが、前年同様、低調に推移した。	地域により差があるが、概ね前年・平年を上回った。(前年比236%、平年比190%)	地域により差があるが、概ね前年並みで、平年を上回った。(前年比85%、平年比186%)
熊本 牛深港	水揚量は38.0トンで前年比35,176.4%、平年比13,064.1%であった。	水揚量は349.4トンで前年比261.4%、平年比323.7%であった。	水揚量は156.4トンで前年比26.6%、平年比37.9%であった。
鹿児島	県4港のまき網で217.1トンの水揚げで、前年比13,844%、平年比24,050%、北薩海域の棒受網では0.1トンの水揚げで、前年比20%、平年比100%であった。	県4港のまき網では1,682.5トンの水揚げで、前年比950%、平年比1,236%、北薩海域の棒受網では38.6トンの水揚げで、前年比145%、平年比220%であった。	県4港のまき網では86.3トンの水揚げで、前年比20%、平年比42%、北薩海域の棒受網では27.4トンの水揚げで、前年比16%、平年比34%であった。 【シラス】西薩海域では、452.6トンの水揚げで前年比351%、平年比82%、志布志海域では459.9トンで前年比683%、平年比241%であった。

注：「前年」は2006年11月～2007年1月、「平年」は過去5年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県（ゴマサバを含むが主にマサバ）、ゴマサバは鹿児島県（マサバを含むが主にゴマサバ）、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。前年は2007年4月～9月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

山口県水産研究センター	沖縄県水産海洋研究センター
福岡県水産海洋技術センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
佐賀県玄海水産振興センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
長崎県総合水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 西海区水産研究所
熊本県水産研究センター	
鹿児島県水産技術開発センター	